

天平勝寶七歲五月三日

田使曾禰連弟麻呂二人略

〔空穗物語吹上之下〕おほい殿廿石いるかなへどもたて、それがほどのこしきどもたて、いひかしく、

〔徒然草上〕御産の時こしきおとす事は、さだまれる事にはあらず、御胞衣と、こほる時のまじなひなりと、こほらせ給はねば此事なし、下ざまよりことおこりて、させる本説なし、大原の里のこしきめすなり、

〔後奈良院御撰何曾〕八十一のきさききらがさね

こしき

〔書言字考節用集七〕蒸籠イロコ本草綱目井樓此字

〔東雅十一〕甌コシキ略中今俗に蒸籠を呼びて、セイロウといふあり、また甌の類也、

〔倭訓中〕編十二せいろう 兵家にいふは城樓と書り、櫓なりといへる、家仕にいふは蒸籠の音なりといへり、

〔餅菓子〕手製集薩摩羊寒

一さつまいもの皮をさり、井籠にてよくむし、略

〔書言字考節用集七〕砂イガハラ又土土鍋ホウロク 炮礫同

〔物類稱呼四〕鑿器用いりな京にていり、ごら、犬和及東國にてほうろく、下總にていり、ごら、常陸にてちやほうじといふ、

今按に、いりな俗にいりがはらと云、いりごら、いりごら、又こうらなどいふは、共にいりがはらの轉語なるべし、又ほうろくは、ほいろの器といふ意、是鑿の屬也、略 又いりがはらは、土のやきなべといひて、今の制とは形かはりたる物也、

〔東雅十〕鑿器用イリナ略 今俗に瓦器のホウロクといふもの、鑿之屬なるものあり、古よりあ